

Developing a method of measuring positive emotions in people with profound mental retardation through the interpretation of 'facial expressions of happiness'

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2017-10-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Karashima, Chieko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/19473

博士論文審査結果報告書

学位授与番号 医博甲第 1781 号

学籍番号

氏 名 辛 島 千 恵 子

論文審査員

主 査 (教授) 生 田 宗 博

副 査 (教授) 染 矢 富 士 子

副 査 (教授) 能 登 谷 晶 子

生田 宗博

染矢 富士子

能登谷 晶子

論文題目 Developing a method of measuring positive emotions in people with profound mental retardation through the interpretation of 'facial expressions of happiness'

論文審査結果

本研究の目的は、実験Ⅰで最重度知的障害者(以下 MR)の日常生活場面における感情を表した「幸福の表情」「嫌悪の表情」「中性の表情」を選択し、さらに実験Ⅱで学生が、その感情を正しく判断できるかということを検証することである。実験Ⅰ:表情の提供者は MR グループ 10 名と成人グループ 10 名。方法は、MR の日常生活場面と成人の演技をした 3 つの表情をビデオ撮影した。次に、SONY PC の DV gate still にて 0.5 秒間隔で静止画像とし、2 名の選択者が JACFEE の刺激画像に基づき、両グループ 20 名分の 3 つの表情を選択した。2 名の選択者の一致率は、MR グループの「中性の表情」以外は、 $k=0.75$ 以上であった。実験Ⅱ:実験Ⅰで選択した表情と感情を表す語彙とをマッチングさせる判断課題を実施した。検証 1 は学生 81 名が判断し、検証 2 は MR グループの表情を施設職員 11 名と学生 11 名が判断した。結果の処理は χ^2 と Fisher の直接法で検定した。検証 1 の結果は、「幸福の表情」が MR グループの正答数 807, 成人グループ 810 で、正答数の比較において有意な差は認められなかった。「嫌悪の表情」は MR グループ 741, 成人グループ 801, 「中性の表情」は MR グループ 692, 成人グループ 781 で、両表情ともに成人グループが有意に高かった($p<0.05$)。検証 2 の結果は、「幸福の表情」において施設職員と学生の正答数は、ともに 110 で有意な差は認められなかった。「嫌悪の表情」と「中性の表情」は、両表情ともに施設職員 110, 学生 102 で、施設職員が有意に高かった($p<0.05$)。これらの結果から、学生は MR グループの「嫌悪の表情」と「中性の表情」を成人グループに比べて判断しにくく、かつ施設職員の方が正しく判断できることがわかった。しかし、学生は MR グループの「幸福の表情」を成人グループとかわりなく正しく判断することができ、かつ施設職員と比較しても、かわりなく正しく判断できることがわかった。よって MR の日常生活場面の「幸福の表情」は肯定の感情を測定するための客観的指標となることが示唆された。

以上のように、伝わり難い重度知的障害者の肯定の意が、表情からの的確に判断できる事を本論は明示し、対象者への質の高い指導と成果を上げる技術開発の基礎を提供するもので、博士の学位に値すると評価できた。